



朽木フィールドステーション

牛がおしえる山里の暮らしと文化

「結いの里・椋川」事務局 是永宙（椋川在住）

椋川は滋賀県の北西部、福井県境に近い山里です。炭焼きに熱心に取り組んだ地域で、最盛期には県内でも指折りの産地だったようです。1960年の燃料革命により炭焼きはすっかり廃れてしまいましたが、まだ1軒の方が炭を焼いておられます。

さて、椋川では3年前から滋賀県立大学・火野山ひろば・地域の方々の協力を得て、牛耕や休耕田での焼畑、麻糸織りなど、さまざまな活動を行ってきました。今回はとくに牛耕についてお話しします。

牛耕を再現する取り組みは、たんに牛で田んぼを耕すことだけが目的ではありません。かつての山里の暮らしに牛はとても重要な役目を担っていました。すぐに思い浮かぶのは、1)田んぼを耕す、2)糞が田畑の肥やしになる、3)牛の背や牛車で重い荷物を運ぶ、といったことです。こうして仕事をこなせる幅が増え、生産性が上がり、より多くの家族を支えることができるようになります。



牛に犁を引かせて、田を起す。そのためには牛の訓練も必要。

しかし、牛の力はそれだけではありません。牛を使役牛として扱うには、そのための道具が必要です。たとえば、ワラよりも丈夫なシナや麻から繊維を取り出し縄を織ります。ここにはシナや麻を活かす世界がありました。

また、稲ワラは、草履や縄、炭を出荷するための袋など暮らしに欠かせない素材であるため、牛の餌や敷料にまわす余裕などなかったのです。こうして山里では、春山に火を放ち黒焦げの野から萌え出た草木を真夏の土用の頃にカリボシ・ホトラとして刈り集めました。つまり、山里には広大な草山があったのでした。今日の椋川の山々では牛が消え、草山にはスギ・ヒノキが植えられたり、あるいはそのまま広葉樹の林に移り変わり、40～50年が経ちました。見渡せば木山ばかりの景色に様変わりです。その他に、牛を養うということは家屋の形態にも影響し、牛と家族同様に暮らすことにより育まれる精神性ということにまで話は及びます。



椋川遠景。かつて集落後方の山は尾根まで草山だったという。

このように、人々の暮らしや文化にとどまらず、山里の景観形成にも大きく関わっていたのです。あえて牛を飼い田んぼを耕すことによって、山と田と里（人）はつながっているという感触を得て、失われようとしている山里の暮らし・文化の中身を実感し、学びながら、いわゆる過疎化・高齢化が著しい椋川の村づくりに活かしていきたいと思っています。現在、椋川には2頭の牛（名前はサカエとハルエです）がいます。最近、子牛も誕生しました。牛に逢いに椋川へお越しください。

ハツエさんから見た筏

亀岡FS 研究員 原田早苗

上桂川、大堰川、大井川、千歳川、保津川、桂川。川の流れは一つですが、流域の人々によってその呼び方は様々です。このうち「保津川」というのは、一般的には亀岡から嵐山までの区間を指します。ここではひとまずこの一つの川を「桂川」と呼びますが、桂川は京都市左京区広河原の山中を源流とし、そこから京都市右京区京北、京都府南丹市日吉町、八木町を経て、亀岡へと流れ、嵐山へと続きます。

この自然の流れを上手く利用したのが筏です。古くは、平城京の寺院建築において丹波の材木が使われていたことから、その歴史は約1,300年ということになります。現在の京都市右京区、南丹市、亀岡市などの木材が筏流しにより都へと運ばれて行きました。山陰本線（鉄道）の開通、トラック輸送の普及、上流の世木ダムの建設などにより次第に衰退し、1948年には完全に途絶えてしまいました。

今回は、保津川（桂川）から少し上流に視点を向けて、筏をキーワードとした流域の人々のかつての生活風景を描いてみたいと思います。

京都府南丹市日吉町の小山ハツエさん（82歳）。ハツエさんは、私の主人の祖母にあたります。はっきりとは覚えていないといいつつも、ハツエさんは筏の話を書いてくれました。義母のマサさんは、田原川から筏に乗って現在の亀岡市旭町あたりに女中奉公に行ったそうです。奉公先は、おそらく農家で子守をしていたのではないかと、いうことでした。当時の筏流しは、木材や物資だけではなく、人の移動にも使われていたこと



ハツエさん

になります。正確な時期はわかりませんが、義母が結婚する前だとして明治中ごろの話ではないでしょうか。

また、義母マサさんの姉は、現在は日吉ダムにより水没しましたが、同じ日吉町大字天若の楽河という集落に住まれて

いました。まさに桂川が目の前に流れているところです。山から伐り出された材木は、宇津（京北下宇津町）、世木（日吉町大字天若）、殿田（日吉町殿田）で筏として組まれていました。ハツエさんは、義母の姉の家は世木に近かったこともあり、筏士が泊まる簡易な宿屋も営んでいたこともお話してくださいました。正確な時期までは特定できませんでしたが、明治末期から大正ころではないでしょうか。その後、1950年に世木ダムが建設されたことで、京北からの筏流しは途絶えました。

ハツエさん自身の生活では直接、筏が関係していたわけではありません。それは、1910年（明治43年）に鉄道が開通し、最寄りの殿田駅（現在の日吉駅）が貨物駅となったことが大きな理由です。筏とは直接関係ありませんが、ハツエさんの夫、幸助さんは、木馬曳（きんまひき）を1958年（昭和33年）ころまで行っていました。木馬曳というのは、牛を使って車が入ることができる道沿いまで山林から伐採した木材を運ぶ仕事でした。また、ハツエさんの義父、利兵さんは、べた（牛）曳きといって、現在でいう運送業に従事し、現在の美山町に電気が通るときには、電柱に使う材木を分水嶺の峠を越えて運んだりもしたそうです。筏だけではなく、車がない時代にもどのようにして物資が流通していたのかを示す貴重なお話でした。



田原川

最後に、ハツエさんに「桂川」以外の呼び方を聞いてみました。「大川か世木川かなあ。」支流の田原川流域に住む小山さんたち住民にとっては、桂川は、大きな川、すなわち大川であり、世木を流れる川なので世木川なのでしょう。

（聞き手：原田早苗、原田禎夫）

漁師の論理 —外来魚を食べてくれるな— 守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

天ぷら、ムニエル、バーガーなど、琵琶湖の外来魚を用いたメニューは今や珍しくなくなった。釣り人に対して外来魚のリリース禁止を定着させる一環として、県は catch&eat と称して外来魚を食べることを勧め、県庁の食堂や県立琵琶湖博物館でも外来魚メニューが扱われている。この動きの根底には、「外来魚を減らし、琵琶湖の水産資源を守ろう」という目的がある。これは、確かに琵琶湖の漁師とも共通する目的ではある。しかし、目的へと向かう県と漁師のアプローチに生じている“ズレ”に、どのくらいの人が気付いているだろうか。

「守山の弥生時代の集落遺跡から、フナの頭の骨がたくさん出ているといます。私らが 2000 年も前から琵琶湖の魚に生かされてきた証です。そんな琵琶湖の魚がここ数年で外来魚に食い荒されている。漁師や滋賀県の食文化を支えてきた琵琶湖の恵みが危機に瀕している。それやのに、在来魚が減ったんなら、外来魚を食べたらええというのは違います。私らは外来魚を食べて欲しくない」と、守山の琵琶湖漁師、戸田直弘さんは話してくれた（2008 年 10 月 24 日守山 FS にて）。漁師は、外来魚を食すること、水産資源として扱うことを決して勧めてはい

ないのである。

このズレの原因は、何か。

戸田直弘さんは、大学や研究会などで話して下さる際、必ず前置きをされる。「漁以外のことになると、ワシなんか陸に上がったカップみたいなものですさかい……」。戸田さんにとっては謙遜の言葉なのだろうけど、私は大いに納得したのである。ズレの原因は、人間とカップの違いにあるのではないか。カップにとっては、琵琶湖は職場や遊び場ではなく、生きる場である。フナやアユは、同じ場に生きてきた仲間なのである。そこにやって来た外来魚は、カップの仲間を食い荒らし、どんどん繁殖していった。そんな外来魚は本来琵琶湖に住むべき者ではない。まして水産資源にするというのは筋が通らない。二千年続いてきた仲間との生活を返してほしい。これがカップの実感なのだろうと思う。“カップ”には、琵琶湖に暮す漁師の論理と誇りが現れているのである。



エリ漁でとれた外来魚。

大きな口をしたブラックバスとブルーギル。

野洲川の勉強会はじまる

聖泉大学 高谷好一

10 月の研究会で、亀岡の河原林さんが筏流しの話をして、大変面白かった。その直後に行われた「バンングラデシュと京滋地方の生存基盤」（萌芽研究）の打合わせでも川が中心的な話題でした。私たちの守山にも近江太郎・野洲川があります。野洲川をやれば、亀岡とバンングラデシュとも比較研究できるのではないかということで、今回の勉強会を始めることにしました。

都合のよいことに、守山には恰好の参考書があり

ます。田村喜子著『野洲川物語』（2004、サンライズ出版）です。洪水常襲地帯の野洲川下流部に新川が掘削された時のことが詳細に語られているのです。この大事業を行おうとした時の官と民の葛藤などがいきいきと描かれています。幸いなことに、この守山には津田義郎さんがおられます。大変もめた官民の葛藤の中であって、体を張って調停役を引き受け、大事業を成功に導いた方です。同時に『物語』の影の著者でもあります。10 月 10～11 日にかけて行った勉強会での津田さんのお話はさすがに臨場感のあるものでした。今後、定例的に勉強会を続けるつもりです。ご参加を歓迎します。

12月の催し

■プロジェクト保津川 第2回環境教室〈亀岡FS〉

1. 日時：12月13日(土) 午前7:50 集合 午前8時～12時ごろ
2. 場所：京都府亀岡市 曾我谷川流域、ガレリアかめおか
ガレリアかめおか(道の駅かめおか)駐車場集合 無料駐車場あり。
電車利用の場合:JR 亀岡駅から京阪京都交通、バスで約10分「JA 京都本店前」下車、コミュニティバス「ガレリアかめおか」下車。またはタクシーですぐ。
3. 服装：川での網漁の実演をご覧くださいますので、暖かい服装でお越しください。
4. 参加費：大人1,000円、小人(小学生)500円
* 曾我谷川周辺で簡単な清掃活動もあわせて実施します。勝手ながら、環境教室のみのご参加はご遠慮ください。清掃活動とあわせてご参加いただけますよう、よろしくお願いたします。清掃時汚れることもあります。各自着替え等ご持参ください。

■茅刈り作業〈朽木FS〉

1. 日時：12月14日(日) 9:30-15:30
2. 場所：高島市内

■茅葺き屋根葺き替え作業〈朽木FS〉

1. 日時：12月下旬まで

2. 場所：椋川集落内

茅刈り作業、茅葺き屋根葺き替え作業の詳細は、「結いの里・椋川」事務局までお問い合わせください。(電話:0740-24-8101 ECC 学園高等学校椋川校内、e-mail:mukugawa@korekore.org)

■カヤダイラ復元(茅株の移植)作業〈朽木FS〉

1. 日時：12月中旬

2. 場所：椋川集落内

カヤダイラ復元作業の詳細は、「火野山ひろば」事務局までお問い合わせください。(e-mail:kamasu@mine.email.ne.jp)

■第7回 定例研究会

1. 日時：12月26日(金) 14:00-16:00
2. 場所：守山FS(滋賀県守山市梅田町12-32)
3. 発表者：安藤和雄(京都大学東南アジア研究所)
4. 発表内容：

「絶対肯定の農村研究哲学の提唱:日本の過疎問題に関する読書ノート」

- ①はじめに一問題提起—
- ②外国人がみた現在の日本の農村に対する疑問
- ③過疎と離農問題の捉え方
- ④おわりに一宮本常一の静かな怒り—

在地の自覚と実践型地域研究

東南アジア研究所 安藤和雄

在地をキーワードに、研究をすすめています。在地とは、辞書的には「(1)住んでいる土地。(2)いなかの土地。在郷。在所」(goo 辞典国語)と理解されています。在地という言葉は、土地とそこに暮らしている人々の関係を表現したもっとも簡単で適確な日本語だと20年来思い続けてきました。「私たちの暮らしは、この土地に、存在し、持続していく」のだという現在進行形の関係なのです。10年ほど前、中国広州の中山大学で農村開発に関する科研のワークショップでのことでした。中国のカウンターパートを前に、「農村開発事業が持続性をもつことは、事業内容が在地化されることである」という趣旨の発表を行いました。中国のカウンターパートから「在地は中国語にはない」という指摘を受け、驚いたことを鮮明に記憶しています。在地は、和製熟語なのです。在も地も中国語にもあります。しかし日本語の在には、中国語にはない「いなか。在郷。在所」という意味が挙げられています(goo 辞典国語)。日本語にとっては、在=ある、いる、は暮らしに通じ、暮らしは、いなかに通じているのです。また、長年アメリカで勉学と研究を続けてきた日本人の農村開発研究者の友人からも、「在地は英語でどう表現するのか」と問われました。どうも英語にもじっくりいく単語はないようです。私の農業・農村開発研究、地域研究が、きわめてこの日本語の感性を出発点にしていることをあらためて知らされる機会となったのです。私はこの感性を大切にしたいと思いつけています。生存基盤科学研究に参加するようになり、それはますます強くなっています。在地という日本語をあみ出し、使ってきた人々は、ある、いる(生存と読みかえてもいいでしょう)の実

体は、土地につよく結びついた暮らしにあると考えてきたようです。

在地という言葉強く意識しはじめたのは、1986年から始まったJICAの研究プロジェクトで、バングラデシュの村に定着し、農業・農村開発研究をフィールドワークによって行うようになってからです。すでに伏線は青年海外協力隊員時代の経験にありました。私は、1978年8月～81年4月まで、青年海外協力隊員としてバングラデシュの南部の氾濫原の農村で暮らしながらNGOの農村開発事業にNGOの一員として参加していたのです。その時の問題意識を1986年からの研究プロジェクトで考えてみたかったのです。1978年～86年、バングラデシュの農業・農村開発は、近代と伝統、外来と在来、の二つの視点から比較考察されることが一般的でした。開発もしくは発展が近代化、外来化であることは容易に想像されるでしょう。近代化の問題が指摘される場合も、伝統、在来との不整合という捉え方によって理解されていました。しかし、農村の現場での数年におよぶ日常的な農村開発事業への参加と、フィールドワークの実践経験は、外部者である私を、無意識のうちに、当事者的に農村にかかわらせていくことになりました。そして、私に在地の自覚を芽生えさせ、私を二元論の呪縛から解放してくれました。近代と伝統、外来と在来、に拘ることなく、村人たちが社会のあり方、生活様式や稲作などの生業に工夫を凝らし、村に暮らしつづけていようとしている実体が、私に飛び込んでくるようになったのです。まさに、村人たちは、在地という一元論の世界でダイナミックに、主体的に生きていたのです。説明という外的な見方から脱却し、自覚という内省を研究の視点として持ちえた瞬間でした。実践型地域研究にこめられた私の期待です。